
孤高の黒猫

佳生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孤高の黒猫

【Nコード】

N4870A

【作者名】

佳生

【あらすじ】

墮天使や悪魔と戦う天使。遙かな空。宇宙と呼ばれる空を舞う、機械仕掛けの天使達。木星から訪れた一匹の黒猫が、月の天使を真直ぐに導く。黒猫と天使は空を守ることができるのか？

第一話：独り言

なぜだか知らないけれど、この時期にこのタイミングで、木星から月へ移住生が来た。

しかも、ずいぶんと癖のある奴らしい。

ただでさえ今は総入れ替え時期で大変だというのに…何を考えているのだろう。手に余る奴なら、直ぐにでも地球に送り出してやる。それだけ切羽詰まってるんだ。

他のことに気が傾けば、知らぬ間に私たちは負けてしまう。

私たちは、そういう場所に生きているんだ。

第二話：かまわない

月の上に造られた対墮天使使用基地。

地球の大人達はルナサイドとかなんとか言っていたが、基地の子供たちはネバーランドと呼んでいた。そう。

この基地にもう大人はいない。続く激戦に、大人から散っていったのだ。

天使と呼ばれる人型機体は子供の方が純粹に扱えるというのに、無謀ともいえる意地が親心か、機体に乗った大人から次々と墮天使に落とされ、その結果が今のネバーランドだった。

引き裂かれようが貫かれようが、勝手に呼び合い修復する天使とは違い、人間はそんな超回復能力なんて持ち合わせはない。

最高年齢が18才、最低年齢が10才。

正にネバーランドと呼ぶに相応しい月面基地に、木星から移住生が一人やってきた。

ネバーランドの者は往々にして喜んでいたが、司令官で最年長者のルビアだけは違った。

「木星から移住生が来るまで、後何分ある？」

白に青のラインが映える制服を身につけた、金髪碧眼の青年・ルビアが疲れたように副官に尋ねる。

副官の少女は少し慌てて、時計のタイマーを確認した。

「えっと…後十分位ですね」

柔らかそうなブラウンの髪を三つ編みにして、両肩から前に流した彼女は、名前をリリンと言う。

天使のような見かけで意外と神経質な司令官に、ほどよい息抜きと愚痴を言う場を提供している、聞き上手な娘だった。

「十分か…リリン、このまま直接向こうに行こう。調度いいはずだ」

会議が終わって自室に向かおうとしていた進路を、応接室にかえて、ルビアはスタスタと歩いて行く。

後を追うリリンは、少し早足になって遅れないようにについて行った。いつもこうなのだが、これは決してルビアがリリンを邪険に扱っている訳ではなく、今のルビアに余裕がないだけなのだ。相次ぐ戦闘で疲労するのは、パイロットだけではない。

全てを一手に任されている司令官の疲労は、前線で戦うパイロットに勝とも劣らないはずだ。

寝る間も惜しんでの作戦会議や食料の状況、下級生達の義務教育やパイロットとしての訓練。

もはやネバーランドの生命線と表しても過言ではないほどに、司令官・ルビアの存在は重要だった。

「今回は何でまたこのネバーランドに移住生なんてよこしたんだろうな、木星は」

「…本人の意志と言うことになっていますが？」

「本当なのか、それは」

これで何度目かのルビアの質問にリリンは律儀に答える。実のところ、リリン自身もルビアと同じ疑問を抱いていた。

「今の時期にここに来ることを望む奴は、死にたがりか馬鹿だな」

投げ遣りに笑うルビアが不意に立ち止まった。

同時にリリンも立ち止まる。

二人から少し離れた通路に黒い服の誰かが立っていた。
大きな特殊ガラスの向こうに見える地球を眺めているようだ。

「黒に赤のライン…あれは木星の制服だな。」

少し制服を整えて、ルビアは挑むように、移住生へと歩み寄る。

そのルビアに気が付いたのか、移住生が顔だけをこちらに向けて、
一瞬だけ目を細めた。

黒い服に赤のライン。

同じ配色で、漆黒の髪に朱の瞳。

真直ぐに見つめて、ルビアは応接室に移住生を連れ戻す。

「君が、木星から来たエレクトだね。遥々月までようこそ」

「……………」

反応が無い。

「それで、シャトルの中で読んだと思うけど、月では勝手な行動は
謹んでもらいたい」

「……………」

「…あまり目に余るようだったら、地球に送ってやるから、そのつ
もりで」

会話が成り立たないと判断して、必要最低限の説明と、僅かな嫌味
を残してルビアが立ち上がったときだった。

今まで何も言わずに口を閉ざしていたエレクトが、小さく口を動かし、
妙に耳に馴染む低い声音で呟いた。

「今、月から地球に移動することは自殺行為だ。…お前は意に従わ
ない者を殺すというのか？」

「…………いや」

淡々と事実のみを指摘するエレクに、ルビアは薄く笑って否定した。

「私が殺すんじゃない。勝手な行動をした者が死んでいくんだ。」

「…そういう所なんだ、ここは」

「…………そうか」

ぼんやりと答えたエレクの声を聞き流しながら応接室を出ていったルビアは、その後に続いた言葉を聞くことはなかった。

「…木星よりはマシだ」

小さな囁きは誰にも聞かれることはなかった。

安心した様子でエレクが応接室から出ようとした時だった。

ーズンツ

嫌に重く響く振動がエレクの足を伝って来た。

エレクはこの振動にはっとして応接室から出ると、ガラス張りの通路から外、つまりは宇宙を見る。

瞬間、黒いゴムのようにブヨブヨした手足の堕天使が目の前を横切り、続いて天使の白いフォルムが追い掛ける。

その二つの向こうから、ヨロヨロと戻ってくる天使の姿が見えた。

エレクは瞳を細めて、通路を出撃ハッチ向かって走る。

数秒して、何かが爆発した音と、閃光が閃いた。

堕天使か天使か、どちらかがやられたのだろう。

エレクは暗く眉をひそめて通路を駆け抜けた。

時間は少し遡り、ルビアは司令室に駆け込んで、言葉を失った。
目の前では墮天使と天使が交戦している最中だったのだ。

「し、司令官!!」

扉の片側に手を突いているルビアに気付いたオペレーターの一人が、
安堵したように声を上げる。

「なぜ私を呼ばなかった!!」

「まさか、これほどのクラスとは思わなかったので……司令官がお
休みしていただける時間をつくろうと……」

「ハア……何やってるんだ、お前達は」

呆れたようにため息をついたルビアは、司令官席に座ると一呼吸置
いて、頭を切り替える。

その間にリリンは他のスタッフから席を譲ってもらい慣れた様子で
席につく。

「被害の状況は!？」

「出た天使は、3・5・8番。内3……と今8が戦闘不能です!」

「くそつ、総入れ替えのこんな時期に……他に出来る機体は!？」

「機体もパイロットも消耗が激しすぎます。戦闘には……うわっ!!」

「5番機損傷!」

「なっ!？」

矢継ぎ早に展開していく戦況に、ルビアは唇を噛み締める。
ここまで戦況が悪化したのは初めてのことだった。
堕天使がまだいるというのに天使が出られないとは…。

「全標準を堕天使に合わせろ！ この際ネバーランドの電力が多少減ってもかまわない、堕天使を倒すことと生き残ることを考える！」

「了解！」

ルビアの苦肉の策に、スタッフは全員同意する。リリンの両手が滑るようにキーの上を通り、ロックを解除してゆく。

「全区画、ロック解除。堕天使に標準。一斉射撃開始！」

リリンが緊迫した様子で告げた瞬間、視界が一瞬だけ白に染まり、納まると同時にまた白くなる。

断続的に続く攻撃。

しかし、とルビアは表情を陰しくする。

この攻撃も永遠に続け訳ではない。

電力がなくなる前に堕天使が消えていなければ、もう打つ手は無いのだ。

奇跡を待つような気持ちで、ルビアは映像を睨み続けた。

その頃、断続的に続く攻撃の振動に、電力が削られていつているのを察しながら、エレクは漸く出撃ハッチについたところだった。
カチカチと危うくなってきた照明に電力がギリギリまで削られているのがわかる。

「おい、しつかりしろ！」

「……ううっ」

「だ…墮天使が…！」

エレクが使える機体を探しているときだった。

足が大きく抉れた機体が逃げ帰り、格納庫内に二人のパイロットが転がり出される。

二人ともエレクよりも3才は若いであろう少年達だった。

その歳にしては大健闘だったと思うのだが、初戦のハードルが高すぎたようだ。エレクは少年達を一別し、格納庫に横付けしたかたちの機体に取り込む。

コックピットは開いていたので、乗り込むのは簡単だった。

「おい！ アンタなにしてる！？」

白の機体に黒い影は目立つ。

あつと言う間に見つかったエレクは、気付いたスタッフの制止の声を作業をやめずに聞いていた。

閉まって行くコックピットごしに、スタッフが懇親の音量で叫んだ。

「機体はペアで操るんだ！ アンター人じゃ扱いきれない、戻れ！
死ぬぞ…！」

このままだったら全員が死ぬことになるだろうが、と思いながら、エレクはマイペースに素早く機体を建て直した。

「死ぬぞ！」

ここぞとばかりに響き渡った言葉に、エレクは息をついて、思い出したように返事を返した。

「別にかまわないさ」

封鎖された空間の中で、その声は誰にも届かない。
目の前は、真っ暗な宇宙なのだから。

「さあ、足が無くても大丈夫だ。俺がお前に羽をやるう」

堕天使が宇宙に浮いているのと基地からの攻撃が停止しているのを見て、エレクは嫌そうに基地への回線を開いた。
返ってきたのは当然、司令官ルビアの声。

『…何のつもりだ、移住生。傷ついた機体で戦うのか？ 死ぬ気かお前は！？』

耳が壊れるかと思うほどに怒鳴られた。

当たり前の反応だが、エレクはこれから自分がしてやること考えると、理不尽な気がしないでもない。

視線を、睨んでくるルビアから逸らして、エレクは少し不機嫌そうに表情を曇らせて伝える。

「これから、こいつを天使にしてやるんだ」
『は？』

返ってきたのは、どよめきと、少しの嫌悪。

「機体に操縦桿が無い理由とか、天使なのに羽が無い理由とか…なんか知らないみたいだからな。このスタイルが完成型だと思ってるみたいだから…」

大人より子供が戦いに強い理由。

これだけは、大人の背を見て育ってもわからない、はばたき方の標。ネバーランドにはうってつけの翼じゃないか。

エレクはコックピット内の椅子にゆったりと腰掛けて、頭の中にイメージを描く。

その中には墮天使などは存在しない。

暗い暗い宇宙の中に一点の光が瞬いて、星の光を撒き散らしながら、どんどんこちらに近づいてくる。

―よし、このままだ。

イメージはイメージから抜け出て、具現へと姿を現す。

神話の世界から、人の世界へと姿を現す天使のように、光は宇宙に翼を広げる。機械仕掛けの天使は、その御足をゆっくりと伸ばし、遅れて顔を上げた。

エレクの頭の中に、あのゴムのような墮天使の映像が送られてくる。

―ああ、それが敵だ。墮天使という。わかるか？

感覚の共有。

自分自身が天使になったような錯覚に、エレクは壁を作り、必要最低限の共有以外を拒否する。

常は二人で操るとあって、一人で完璧に操るのには時間がかかりそうだった。

―ホラ、向こうの奴が、こっちに来たぞ？ 躲すのか、答えるのか早く決めないと…

淡く火花の散る背に、弱い痛みを感じながら、エレクは確かな意志

を感じ取る。半分だけ共有した意識。

共有している相手は、この天使に他ならない。

エレクはその意志の通りに片手を前に出し、突進してくる堕天使の頭を押さえつけた。

ガンツという、空洞のない金属が衝突した音に、回線の向こうから悲鳴が聞こえる。

『そんな馬鹿な…』

何に対して驚いているのかは知らないが、ルビアの気の抜けた声音に、エレクは手のひらに力をこめた。

—このくらい、出来るだろう？ こいつを倒して家に返ろう。

ギリギリと、エレクに答えるように天使の手に力が入り、堕天使がのた打ち始めた。

同時に、あのゴムのような手足が見苦しく、鞭になって天使に襲い掛かる。

回線から聞こえる声が、とても煩かった。

「斬り落とせ」

思念ではなく、ガラスの破片のような鋭さのエレクの声に、聞いた者全員が声を失った。

完全に支配されているような、鋭利に突き通る声が恐ろしい。

それは既に絶句の域だった。

深い青に漂う黒の触手。

際立たせているのは、一瞬で散々に四散した、光の翼の羽根達。

螢火に似たそれらに囲まれて、頭の潰れた墮天使が宇宙に流される。しかし、その姿も溶けるように消えてしまうのだ。

一度だけ記録の映像で見た、地球で言うところの灯籠流しを連想させる光景を目の当たりにして、漸くルビアは司令官席から立ち上がり、司令室を退出した。

回線を切ったエレクは羽根の消えきらない、その場所で、ただジッと青に輝く地球を眺めていた。

夢が叶う日を信じて。

第二話：かまわない（後書き）

何だか、急いで書きちゃった感がありますね。とりあえず、キャラクターがつかめる話になってたらと思います。

第三話：黒猫ちゃん？

バタンツ！ ドンツ！

「……………っ！」

「勝手な行動はするなと言ったはずだ！」

堕天使を倒し終わって、月面基地・ネバーランドに辿り着くなり、エレクはルビアに引きずられて、一つの部屋に押し込められた。懲罰房とでも呼べばいいのだろうか。

ルビアに突き飛ばされて、尻餅をついたエレクの前でガチャリ、と錠の落ちる音がした。

「少し頭を冷やせ、移住生！」

きつく打ち付けるように言い放って、足音を乱暴に響かせながら歩いて行ってしまったルビアに、暫らく茫然としていたエレクが思い出したように苦笑する。

「弁解の余地もない。随分と大人振った子供がいるな。ピーター・パンか？ あいつは」

だったら、後ろにいた少女は控えめに乙女なティンカーベルだろうか。

懲罰房の割には綺麗で整った部屋を見渡して、エレクは簡易のベッドに腰をおろす。
絶妙に柔らかい。

寝たら気持ち良さそうだ。エレクはすぐにベッドに横になり、ぼん

やりと考え事をする。

地球がこんなに近くに見える月。

大人がいないと聞いていたから、どんな無法地帯かと内心警戒心全開だったのだが、思っていたよりも普通なところだ。

独房ですら、こんないい造りになっているなんて、木星では考えられないことだ。

程よく暗い部屋の天井を眺めて、エレクはため息をつく。

「最初っから、印象最悪だな、俺」

「そうだねえ」

「……………そうだな」

ドアの向こうから返答が返ってきた。

エレクは不審には思いながらも、相手の気持ちを察して、あえて普通に答えてみる。

一瞬の沈黙。

「君は天然なのかな？ それともイジメっ子なのかな？ 子猫ちゃん」

「……………」

「君は可愛い可愛い黒猫ちゃんじゃないか。人間関係に悩んでいるところも、初々しくてよろしい！」

何言ってるんだ、こいつは。馬鹿か？

大らか過ぎて逆に気持ちが悪い扉の外の誰かに、エレクは視線を巡らせる。

廊下の光が僅かに覗く小さな窓に…………

「僕はルナ、よろしくね」

変な人形がくつついていて、手を振っていた。

エレクは即座に近寄り、間髪入れずに、人形を引つたくる。

「黙れ、人形使いが！」

「あぁっ！」

気持ち良く誰かの手から離れた人形は、ブラン、とエレクの手の中で宙吊りになっている。

同時に忙しく動く誰かの手。

気色悪いことこの上ない。寂しそう見つめてくる人形のつぶらな瞳と、その手を見ていたら、何だか可哀相になってきた。

「……………」

そっと、手作りなのに異様に可愛らしい人形を、手に返してやった。

すると、それは息を吹き返したように、ビクリと動いた。

その動きがリアルで、複雑な気分になる。

「……ひどいな、もう！ こうゆう強引な行動は、花嫁を強奪する時だけにしなよね」

「例えの意味がわからない。何が言いたい」

「乱暴はいけないよ」

「…………… だったら、最初からそういえば良いだろうが」

ふん、と鼻を鳴らして、エレクはベッドに座り直す。それに応じて、格子の隙間から人形が身を乗り出して、エレクを観察する。

「何だよ」

「おつ話しよーよお」

「嫌だ」

と言いそうになったエレクだったが、人形のつばらな瞳にその言葉を飲み込む。

この得体の知れない感覚はなんだ………？

エレクが思った瞬間。

「萌え〜萌萌〜」

今のは聞かなかったことにしよう。

あの言葉を認める訳にはいかない、とエレクは心の中で思った。

「で、何を話すんだ？」

話、と言ってもエレクには何も思いつかない。

特に話すようなことはないし、話せることは少ないのだ。

しかも、ネバー・ランドに辿り着いたのは、数時間前であるのだし。

「そうだな、まずは自己紹介だよな。黒猫ちゃんのお名前は？」

間延びした話し方で、人形はクネクネと踊りながら尋ねる。

エレクはすでに自己紹介を済ませていたつもりだったが、それは、相手が一方的に名乗っただけのこと。

面倒そうに、エレクはため息を吐いた。

「俺の名前はエレクだ」

「エレク君だね、エレクエレク、よし、覚えた！」

「お前は？」

「……………ん？ ルナだよ？」

「本体の名前を教えろ」

「企業秘密、だよ」

「……………」

捻り潰してやろうかと思ったが、そこは堪えて、エレク黙り込む。

「あつ、忘れてた！　ねえねえエレク君。君は木星にいた時、天使には一人で乗ってたのかな？」

エレクの機嫌が、一気に悪くなった。

表情にこそ出さないが、僅かに目付きが細まる。

薄暗い部屋の中で、赤の瞳が不気味に輝いて見えた。相手が人形でなければ、きっと立ち竦んでいる事だろう。

「最初は二人だった。」

最初は。

次に行く言葉はなかった。それでも、エレクが言いたいことはわかる。

最初は二人だった。

でも、一人になった。

と、いうことだろう。

時々いるのだ。

二人で操る天使を、一人で操ってしまう人間が。

とても希有な例だが、このネバーランドにも過去に数名、一人で天使を乗りこなしたパイロットはいる。

いるのだが、今のネバーランドには、そのデータしかない。

子供の樂園には、一人乗りと直接接点のある者はいないのだ。
だから、一人で戦闘に行ったことを無謀だと、自殺行為だと戒める。
エレクにとってはいい迷惑だ。

「まだ、何か聞きたいことがあるのか？」

ごろり、とベッドに横になったエレクが、鬱陶しそうに聞き返す。
人形は困ったように頭を抱えてみせると、指の無い手で頬を掻いて
みせた。

「ううん、今日はいいや！　なんだか、嫌なこと聞いちゃったみたいだからね。」

人形のくせにシヨンボリとした仕草が、様になっている。

「えへへ……うん、じゃあね」

嫌な雰囲気沈黙を、誤魔化すように笑いながら、人形はその顔を
引っ込めて、本体に連れられて、去っていった。

その足音すらも消えて、エレクは今度こそ、一人になる。
程よく暗くて、静かで、更に寝心地のいいベッドがあつて……。
エレクが眠りに沈むのに、それほど時間はかからなかった。

そこは、真っ暗だった。

星が見えない宇宙に、俺と相棒は投げ出された。
いつもと違う、黒くて暗くて深くて広くて、何もない宇宙。

「エレク、調子どうだ？ 装置、ちゃんと動いてるか？」

「ああ、——、お前はどうか？」

？

「バツチリバツチリ！ 快調快調」

なんで、あいつの名前がでてこないんだ？

……。

息がしづらい。

「おい、なんか変じゃないか」

「は？ どこがだ」

「いや、色々だよ」

なんで、俺だけ気付かなかったんだろうな。

あいつだけ、気付いて。

あいつだけ、察知して。

そして、あいつだけ。

「エレク！ 下だ！」

「！？」

それは突然だった。

あいつが、そう言った途端に、周りの闇が晴れたんだっとな。
それから……。

叫ぶことすら、できない。声がでない。

まさか、まさか、あいつが。

こんなところで？

なぜ、あいつが

嘘だ。

「……………っつ」

目の前が歪んだ。

光が、見えた気がした。

ヒラヒラとした光だった。そして、あいつが。

あいつが

消えた。

「エレクさん？　大丈夫ですか？」

「……………！」

誰かの声に、エレクは短く息を吸って目を覚ました。

「……………」

しばらく、ぼんやりと天井を見つめる。

「エレクさん？」

リリン、だったか。

確か、彼女はそんな名だったはずだと、エレクは思い出す。

まだ悪夢から抜け出しきれないエレクは、取りあえずリリンに失礼が無いように制服を正した。

と、いつても、手で叩いただけなのだが。

「うなされていましたけど、大丈夫ですか？」

「……………ああ」

心配をしてくれたリリンに辛うじて返事は返したが、それよりも、うなされていたのを見られたことに対して、エレクはうるたえた。もちろん、表情には出さずにだ。

「俺、何か言ったか？」

不安そうに、というべきか、恥ずかしそうにというべきか、その外見によく似合った反応で、エレクはリリンに尋ねる。

「はい。連れていかれたのか？とか、お前なんだな、などと。」

「……………忘れてくれ」

かなりキワドイところを聞いたものだ。

しかし、リリンは正直に話、さらにはエレクの申し出までも了承した。

「私の方こそ、不可抗力だったとはいえ、不愉快な思いをさせてし

まいりましたから。当然です」

心優しい他人思いの娘で助かったと思いながら、エルクは思い出して尋ねた。

「ところで、何か用事があつたんじゃないのか？」

そうでなければ、ここに来る理由はない。

用事もなく来るようなところではないし、用事もないのに来られては、こつちがら困る。

さっきのようなアクシデントも結構困るのだが。

「あ、そうでした。ルビアさんが呼んでいましたから、私、それを伝えるに」

「パシリか？」

「いえ、私が自分でしていることですから」

そつない返答で、リリンは穏やかにエルクを促しす。エルクは少し疑わしげにリリンの背を見ていたが、やがて、呆れたように息をつく、窓の外へ視線を移した。

そこには青い星が一つ、ぽつんと浮いているだけだった。

第四話：俺の命は重くない

長い廊下を歩き、エレクが連れていかれたのは、応接室でも司令官室でもなく、医務室だった。

その事を不振に思いながらも、エレクはリリンの後について中に入る。

医務室は無駄に広がった。

薬品棚もベッドも机も小さく見えるほどだ。

その中で、ルビアと誰かが、向かい合って話をしている。

「ルビアさん、連れてきました」

「！　こっちに来て座れ。……………移住生、お前もだ」

「……………」

無言のまま、少し機嫌を悪くして、ルビアと向かい合うように座ったエレクに、必然的に隣になった誰かが、小声で笑った。

「『機嫌斜めやねえ、子猫ちゃん』」

「……………！？」

聞き覚えのある声。

僅かに驚いて、そちらを向くと、にっこりと笑ったそいつと、あの人形の姿があった。

「俺、一応、医者ウォルーナいうね。ま、ぼちぼち、よろしくな」

人形の時と雰囲気が違う。

言葉のイントネーションすら違った。

エレクは、あいさつ以前に警戒心が増して、凝視するようにウォルーナを睨み付ける。

「あはん、そんなに見つめんでよ。何何？　そんなに俺、カッコええ？」

「……………道化」

「なっ！？　このスーパービューティーに向かって！　何、そのいい方！」

「落ち着け、ウォルーナ」

直角に折れた話の腰に、ルビアは半眼になって話を戻す。

止められたウォルーナは、

「分かってますって！」

、と笑ってルビアに向き直った。

「……………それで、だな。移住生」

「俺はエレクだ。移住生じゃない」

「いや、移住生でしょ」

「……………黙れ」

「いやん、怖い」

ウォルーナに茶化されながらも、エレクは翻弄されることなく、ルビアを見つめる。

ルビアは少し視線をさ迷わせ、決心したようにエレクを見返す。

そして、二人の間にあった、背の低いテーブルに手をつき、限界まで頭を下げた。

「エレク、すまなかった」

「……………」

いきなり頭を下げたルビアに同じた様子もなく、エレクはルビアの金髪を冷たく眺めていた。

「……………言い訳はしない。理不尽な対応については謝る。すまなかった。私の勉強不足の結果だ」

「そうだな」

「……………」

「……………」

「……………」

「で、いつまで頭を下げてるつもりだ。頭下げてる暇があったら、勉強したらどうだ？ ん？」

嫌味に笑うエレクに、顔を上げたルビアは苦笑をもらす。

もつともなことなのだが、エレクの言い方が、余りにもサバサバしていたので、認めていたはずの自分の不手際を、二重の意味で再認識させられてしまった。

ただ見ていたリリンも、微笑んでいる。

しかし、ウォルーナだけは、無表情でテーブルの上のカップを見つめていた。

睨んでいる、といった方がいいのか。

「…………どうした、ウォルーナ」

さっきまでがさっきまでただただに、釣られてルビアも深刻な面持ちになる。

「あんな、ちょっと、言わなあかんことがあんな。まあ、口で言うより、見た方が早いんかもしれんけど……………」

「それは、俺も関係してるのか？」

関係ないことに巻き込まれたくない、というオーラを漂わせたエレクだったが、ウォルーナは小さく頷いた。

「関係あるはずや。エレクなら分かんと思うねんな」

「……………？」

神妙な面持ちのまま連れていかれたのは、医務室の隣の部屋だった。しかし、この部屋は廊下からは入れない。

医務室から、そして特定の人間しか入ることの許されない、集中治療室に似た、完全閉鎖された病室だった。

三×四で計十二の個室で構成された部屋は、まだ一室しか埋まっていない。

その一室に、ウォルーナは一同を招き入れる。

ベッド、点滴、心電図。

それはそこに眠る、たった一人の少年のためだけにあった。

「……………ウォルーナ、彼は体調を崩した末の長期療養中なはずでは？」

さすが、というべきか、ルビアは瞬時に少年を記憶の中から見つけた。

彼は優秀な天使パイロットで、数々の危機を乗り切ったエースだった。

あの日、倒れるまでは。

「ほんまは、そうなはずやってん。けどな、あれから目え覚まさへんねん」

「目を、覚まさない？」

「体は生きてんねん。呼吸もして、心臓も動いとるし、爪も髪も伸びる。せやけど、話もしなければ動きもしない。死にながら生きるようなもんや」

規則正しく鳴る鼓動に、ウォルーナは目を細めて、ある病名を告げる。

エレクは、それを知っていた。

「共有症候群……エレク知ってるか？」

反応できなかった。

エレクは数秒間を置いてから、ようやく顔をそちらに向ける。

「……………ああ、知ってる。天使と長時間意識を共有した際に現われる症状だ。悪化すれば……そうなる」

言って、エレクは少年を見やる。

生ける屍、とでも言えば良いのだろうか。

エレクの右腹部が、引きつるように痛む。

「……………」

「共有症候群は、病気なんや。うん。病気。大人が残していきよつたノートに書いてあった」

「治せるのか？」

眠り続ける少年を気遣わし気に見て、ルビアは尋ねる。
が

「治る、けど治らへん」

ウォルーナの答えは曖昧なものだった。

「治せんこともない。けど、共有症候群は癖になりよる。麻薬みたいに、一旦離れても次に手え出せば、折角治ったもんが全部オジャン、や」

「それで死にたくなければ、二度と天使に近づかないこと。……………パイロットが減るんだ。こうやって」

動くことのない少年から、エレクは哀愁の漂う表情で視線を逸らす。

今のネバーランドは、このまま行くと、確実に木星の二の舞になる。

共有症候群が全体に広がり、そして戦力がなくなるのだ。

死ぬことを待つだけ。

「……………どうしろと、言うんだ」

俯いたルビアが苦渋に顔を歪ませ、堅く手を握り締める。

子供だけのネバーランドに子供だけしかない疫病が流行りだした。

治せる大人は当然いない。

しかし、希望を繋ぐ黒猫は存在した。

子供たちよりも物知りで、でも、子供たちよりも短命な黒猫。

彼は策を持っていた。

「生き残る戦いではなく、後に繋ぐ戦いを、木星はしてきたんだ」

唐突にエレクは切り出した。

それは独白に近い。

「だから、これは生き残る戦いではないけれど……」

けれど

「ただ死ぬだけの戦いでもない」

エレクが見たのは、固体でなくなった母星。

策をエレクに托して、そうして初原に戻っていった木星。

木星が消えてしまったことに、誰か一人でも気付いているだろうか。

きっと、誰もいないだろう。

だからこそ、エレクはやらねばならなかった。

自分に関わった者、それらが残した全てを、次に繋ぐために。

「……………最強が全てを駆逐すれば、勝利が得られる」

「な……………？」

必要最低限に短縮されたエレクの案に、ルビアは理解するのが遅れた。

「これは墮天使の特徴を利用した作戦なんだ。奴らは、限りなく人間に似ている。だから向こうも弱い奴から徐々に強くなる。そこを利用するんだ。強い奴は強い奴で叩く。そして弱い奴も強い奴で叩く。……………一番強い奴が、すべてを倒すんだ」

「だが、それは……………」

訝しげにルビアはエレクを見る。

「ああ、確実にパイロットはそこから消えるだろうな。共有症候群末期か、向こうの最強と相打ちか」

淡々と話すエレクに、ルビアは恐怖を感じる。

今、エレクが話しているのは、命の話だ。

それなのに、どうして、そう平然とはなしていられるのだろう。

「パイロットはかならず消える。だから、それを俺にやらせろ、ルビア」

「なっ!?!」

「俺はここに来て日は浅いし、パイロットとしては最適なはずだ。」

悲しむ者は少ない」

「……………分かってるのか？ それは、自殺志願と同じだぞ？」

「分かっている」

困惑するルビアを見返すのは、とても自殺志願者とは思えない、エレクの挑戦的な朱色の瞳。

「時間はない」

「……………考えさせる」

「考えている暇はない」

「…考えさせる」

「考える必要はない、俺の命は軽い」

「考えさせる！ 命を軽んずる者は嫌いだ！！」

エレクの余りにも非人間的な発言に、ルビアは投げ付けるようにして言うと、数秒エレクを睨みつけ、

「ふん」

と部屋から出て行ってしまった。

あわてて後を追うリリンは、部屋を出る寸前に、困惑した様子でエ

レクとウォルーナに礼をした。

「……………」

しばらくして、エレクも部屋から出ようと歩を進める。

その背に、ウォルーナの苦笑が向けられた。

「本当にもう、二人とも頑固で困るわ」

それが届いたかどうかは分からない。

だからこそ、ウォルーナは大きくため息を付いた。

この宇宙の中では、ありとあらゆるものが尊く、そしてちっぽけなのだから。

第五話：クロ先輩・シロ先輩

ウォルーナに、共有症候群の発病者と引き合わされてから、既に二週間。

この期間の間、エレクは一度もルビアと会話をしていない。食堂や医務室、廊下などで何度か顔は合わせたものの、そこからの進展は全くなかった。

リリンとは何度か話したのだが、それはルビアの事とは全く関係なく、木星での出来事や、休息はしっかりと取っているのかなど、主にエレクを気遣った会話である。

別にルビアを怒らせた事が気になり、両親を苛まれている訳ではないのだが、どうにも暇を持て余しているようで、いらぬ事まで気がまわっているらしい。

「クロ先輩！」

「・・・・・・・・・・？」

「本当だ、クロ先輩だ！」

「・・・・・・・・・・」

「あ、ちょっと、先輩の事ですよ、貴方ですよ貴方」

「・・・・・・・・・・貴方って誰だ」

食堂でぼんやりと椅子に腰掛けていたエルクに、ちょうど授業を終わらせた生徒達がわらわらと集まってくる。

逃げたい、と切実に心に思ったのだが、一つしかない食堂の入り口から十数人出てくる彼らの中を縫って出て行くことは、本末転倒な気がした。

「謹慎処分ですか、先輩」

いきなりエグい事から尋ねてくるのは、若さ故なんだろうか。

「謹慎処分じゃない、はずだ。よく分からない。それよりも、お前等、何しにここに集まるんだ。散れ」

「喧嘩したんでしょー？ ウォルーナが言ってたぞ！ 二人ともお馬鹿さんだって言ってた」

「言ってたな。・・・そうそう、そのウォルーナがさ、クロ先輩呼んで来いって言ってたんだ。二人っきりで話があるって」

「・・・・・・・・・・」

どうして人の脳は、こんなにも記憶力に長けているのだろうか。

今すぐ、前言を聞かなかった事にして、ここから立ち去りたい。

多数の人間は苦手だが、ウォルーナは苦手を超えて、嫌いだ。

あの軽薄な雰囲気、笑顔なんだかニヤついているだけなのか分からない表情、そしてなにより、あの手作り人形。

「なるべく早くつてさ」

「・・・・・・・・分かった」

いきたくない、が、ウォルーナは一応、曲りなりにも医者なのだ。

ここで断ってしまつて、共有症候群の解決策を泡にってしまうのは良くない。ウォルーナの話が、共有症候群の事なのかも分からないが。

取り合えず、行くにこしたことはない、という事だ。

「・・・・・・・・・・はあ」

ため息をついて立ち上がったエレクの背を、生徒達が見送る。

いつからだろうか、彼らはエレクをクロ先輩と呼ぶようになった。それは、エレクがこの制服を一向に着ようとせず、木星の、黒地に赤のラインの制服を常用している清だろう。

白地に青のラインの月の制服とは真逆のデザインなので、彼はここで目立つ事この上ない。

かといって、彼が月の制服を着て、似合うのかと問われれば、大半は首をひねるだろう。似合わない、とまではいかないが、似合うことはない。

故に、クロ先輩だ。

ほのかな憧れの意もそこにはあるのかもしれない。

最高年齢の、指令、ルビアと対等に渡り合えるのは、今までウォルナだけだったのだ。そこに異色のエレクが割り込んで、無理矢理にルビアを説き伏せたと言うのだから、知名度があがるのも頷かれる。

最初は、無表情であるし目付きも鋭く、更に色が朱だったので、生徒達も近付けなかったのだが、そこに、ある勇気ある少年があらわれたのだ。

「あつ！ クロ先輩、はようです！」

「……………ああ」

「ウォルナさんのどこですか？ いってらっしゃい！」

「……………ああ」

その勇氣あるものが、今エレクに元気すぎるほどの挨拶をした少年、トキハだ。

彼はその日も食堂で水を飲んでたエレクに、いつも通りにあいさつをしたのだった。

▼
▼
▼

「おはようございます！ 先輩は今日、何か用事がありますか！？」

「別に。………… お前、誰だ」

トキハの元気すぎる声音に、エレクはうるさそうに眉を寄せて、彼の青い瞳を見る。

ネバーランドは、金髪碧眼の人工が異常に多い。

木星は黒髪黒眼がことと同じくらいに多かった。なので、エレクは木星でも少し変わった存在だった。

「自分はトキハと言います、パイロット候補生です！ クロ先輩って呼んでいいですか！？」

食堂入り口付近で、他のパイロット候補生が不安げにこちらを見て

いることに気が付きながら、エレクは小さくため息をつく。

クロ先輩ってなんだ、と思いながらも「好きにしろ」

と答えると、トキハが小さくガッツポーズを決めた。

そして、食堂入り口付近からも、何やら歓声が。

「先輩、これから僕ら授業なんですけど、シュミレート一緒にどうですか!？」

満面の笑みで、

「一人余るんですよ!」

と、笑顔で言うトキハを、数秒無言で見つめたエレクは、僅かばかり微笑んで、トキハに頷いた。

▲ ▲ ▲

と、後半は僅かばかり美化されたきらいがあるが、そんなこんなで今の少年等とエレクの関係は成立していた。

エレクと付き合ってみると、彼は以外にも優しいことに気が付く。

世話上手と言うのだろうか。

無口に優しい、ワイルドなお兄さん? 迎えに来てくれたなら、友達に見せ付けたくなるような彼氏?

そんなポディションにエレクは立たされていた。しかし、本人はそんな事とは知らない。

「クロ先輩って、なんか格好いいよね」

「ルビアさんのこと、今度からシロ先輩って呼ぼうか」

「いいね！ それ！」

「だろ」

食堂での彼らの話は盛り上がる一方、シロ先輩と呼ばれる事になったルビアは、医務室でエレクと劇的な対面を果たしていた。

戸を開けたら、奴がいた。

思わず、ルビアは一步後ろに歩を下げた。

第六話・ドッペルゲンガーだ（前書き）

物語の終盤になります

第六話・ドッペルゲンガーだ

「なんだ、出ないのか？」

エレクにそう言われ、ルビアははっとして、なぜか更に一步下がる。
気まずいと思っているのは自分だけで、エレクは微塵もそんな事は
思っていないようだ。

「……………」

「……………」

妙な沈黙を守ったまま、二人は動かない。

「おー、ナイスタイミング！ エレクはやっぱ年下に弱いんやなあ」

「なぜ、そうなる」

ニヤニヤと笑うウォルーナに、エレクは視線をルビアからそちらに
移して、顔をしかめる。

ヘラヘラと振った彼の手には、例の人形がはまっていた。

「それ、どうにかしろ」

彼の手に合わせて、クネクネと動く人形は、決して愛らしいとは言えない。

むしろ、気持ち悪い。

「……………」

「まだ……いたのか」

「……………いや、私は行っているのか？」

「……………いいのか、ウォルーナ」

「うーん……おらんよりは、おった方がええんかな？」

疑問符を付け、人形の首を傾げてみせる。

戻ってきたルビアは、不安そうに眉を潜め、エレクの隣のソファーに腰をかける。

「んとなり、一応、ルビアが軍事担当なんで、俺がその他担当なんね。でえ、今回エレクを呼んだのは、もうすぐ、ネバーランド……じゃないな。ルナサイド建設記念日なんねや。お祭り、みたいな」

「……………で？」

「でって……………まあええわ。そんで祭りっちゅうからには、イベント盛り沢山、ときめきも盛り沢山」

「帰っていいか……………？」

何となく嫌な予感を感じたエレクは眉を寄せて立ち上がろうとする。

当然の事に引き止められたが、エレクは嫌そうに、笑っているウォルーナを睨む。

「あつは〜！ 郷に入らば、郷に従えやで。 っても、エレクはただぶらぶら店見て歩いてりゃいいだけやからねえ。 本番は夜や！」

ビシッと人差し指をエレクとルビアに向けたウォルーナに様々なツッコミを心で入れながら、エレクは一先ずため息を吐く。

何だか、面倒なことになりそうだ。

「夜に、お楽しみのダンスパーティー的何かが存在する訳よ。 それに出てくれたら、別に後はどーでも」

「それが一番面倒な気がするのには気のせいかな？」

「気のせいじゃないと思うぞ」

ぼんやりと隣から相づちをうつルビアを見やり、エレクはソファの背もたれに深くもたれる。

話を聞いただけで疲れてきた。

「面倒だ」

「そう言つなや。 乙女達にウキウキと、少年達にキラキラを与え
ると思つて！」

「キラキラ……………」

「僕も先輩みたくなるんだいっ！ という視線」

「ならない方がいいと思うんだが……………」

ぶつかるエレクとルビアの視線。

そう言えば、口論の末話せずじまいだった。

ふー、と呆れた苦笑で、体重を後ろにかけるウォルーナ。

相変わらず人形はクネクネと気色悪い動きで踊っている。

「ってな訳で、ルビア、エレクの服の事、リリンに頼んどいてや」

「……………わかった」

不服そうにしながらも頷くルビアは、エレクから視線を外して腕を組む。

「やっぱ、色は黒で、リボン……………や、ネクタイは赤やね。 うん。
エレクが白の服着てたらキショイわぁ」

「失礼な」

言いながら、自分でも似合うとは思っていなかった。

「ん、これで話はお仕舞い。 各自カイサ〜ン」

パチンツ、とウォルーナが手を叩く。

それを合図に立ち上がりかけたエレクの右脇腹が、上下に引き裂かれるように、激痛を訴えた。

「……………っ」

「どうした、エレク？」

とず、と俯いてソファーに戻ったエレクにルビアは、覗き込むようにして尋ねる。

「…いや……………問題ない。大丈夫だ」

「ん？ ほんまかあ？」

「ああ……………問題ない」

相変わらずの無表情さで、エレクは立ち上がる。

「少し、そうだな、少し、考え事をしていただけだ」

考え事と、よろめきがどう関係するのか分からないが、その場はなんとか、それで誤魔化せた。

しかしそれが、墮天使が来たお陰であった事に、エレクはいい気はしなかった。

「おい、エレクー!!」

ルビアの制止の声を聞きながら、エレクは逃げるように部屋を出た。

向かうのは、当然、出撃ポッド。

■

「あ、クロ先輩！」

「トキハか？」

出撃ポットに着いたエレクを迎えたのは、ペアのいないトキハだった。

ペアのいないものは、負傷したものの代わりとして、こちらに残ることになっている。

例え、機体の天使が残っていたとしてもだ。

「おい、出れるか？」

「はい！　つて、いいんですか、出て！」

「問題ない」

「なら、OKです！」

ビシッと右手で敬礼して微笑んだトキハに対し、一瞬苦々しく思いながらも、エレクは機体の上部、メインのコックピットに乗り込む。文句も言わずにサブのコックピットに乗り込んだトキハはそれでも嬉しそうだった。

「何、笑ってるんだ」

微調整を済ませながら、下のトキハに尋ねると、彼は弾んだ声で答えた。

「クロ先輩のサブやれるなんて、ついてるなあって思いまして…それに先輩は強いですから！」

「…………別に強くなんて無い。気を抜いたら、すぐにやられるさ」

「またまた、御謙遜を！」

「俺は、そろそろお前も気を引き締めろ、という意味で言ったんだがな。…………行くぞ」

「はい！」

覇気がありすぎる声に、少々顔をしかめながら、エレクはその足を動かした。

実際に動くのは天使の足で、蹴るのは空中のはずだが、確かに足の裏には何かを蹴った感触がある。

と、

『エレクトツ!』

「なんだ」

横から頭を殴られたような衝撃を覚える怒声が、回線から飛び込んできた。

これに驚いたのは、何を隠そう、トキハである。

『私はまだ、許可など出した覚えはない!』

「ああ、そうか。…………ふん、少し遅かったな」

『遅かったな…………じゃない!　せめて、一言、言っていけ!』

「言ったところで、聞くのか、お前が」

『……………』

「そう言うことだ。じゃ」

『あ、おい、エレクトツ!』

何の気なしに、エレクトは回線を切った。

「あわわわわっ！ 先輩、問題ないんじゃないんですかっ！？」

「ん？ 問題ないだろ？」

「無くないですっ！」

「と言っても、場所はすでに宇宙だ。」

「今更そんな事を追求しても、どうにもならない。」

「要は、やったもん勝ち、ということだろう。」

「……………なあ、何でお前は一人余るんだ？」

「戦闘区域に向う途中、エレクに唐突に尋ねられ、トキハは明らかに焦って答えた。」

「えっ！？ それはですね、何だか長期休暇の先輩がいるそうで……………」

「ああ、そうか……………お前が」

「どうかしました？」

「いや、なんでもない」

共有症候群で倒れたパイロットのペアが、トキ八だったのか、とエルクは納得した。

「あ、そろそろ肉眼で見えますよ、って……………うわっ先輩!？」

「口を閉めろ。舌噛むぞ」

笑いながらエルクが言った瞬間、爆発でもしたように機体が加速し、一気に戦闘区域のど真ん中に押し入る。

途中、数体の墮天使を破壊しながらだったので、機体は大いに揺れ、回転した。

といつても、宇宙空間なので余り体に衝撃はない。

「……………クロ先輩、余り無茶はしないで」

「無茶なんかじゃない。誰だって、やればできるぞ。やらないだけだ」

「……………そうなんですか？」

「そうだ」

「じゃあ、僕にも？」

自信なさ気に、少し声の小さいトキハに、エレクは断言した。

「できる。練習すればな」

トキハの表情が輝いたのがわかる。

が、今はそんな時間はない。

「練習は帰ってからだ。今は、こいつらを潰そう」

「はい！」

仲間の機体と合流して、次々と墮天使を破壊していく様は、今までに無いくらいに、決定した勝利を確信付けていた。

今、ルナサイドのパイロットは全盛期であり、仲間内のフォローもしっかりとしている。

エレクは、この波にのれば例の作戦はうまく行く、と考えていた。

しかし、トキハは、あの天使の羽根が見られないのが少し残念だと思っていた。

本当に、一瞬、モニターで見ただけだったのだが、それだけでも、心に刻まれてしまったのだ。

一目惚れ、と言っても、過言ではないほどに。

「先輩！ 終わったみたいですよ！」

最後の一人を倒しおわり、疎らに帰り始めた天使達を映しながら、トキハは誇らしい気分で、メインのエレクに呼び掛ける。

しかし、返答が無い。

「……………先輩？」

不安になって、シートベルトを外し、繋がった上のメインコックピットに移動すると、そこでエルクは脂汗を浮かべ、うずくまっていた。

「先輩！」

右の脇腹に走る痛みに耐えているエルクは、引き裂かれるような悲鳴をあげるそこを、必死に押さえ付ける。

いるのか、ドッペルゲンガー。

激しく反応する、右脇腹の中の、奴の欠けらに、エレクトはモニターをにらみつけた。

それは、そこにいた。

「墮天使っ！？」

その姿を見つけたトキハが、エレクトの代わりに天使を操ろうとしたが、それよりも早く、向うは闇の中へと消えてしまった。

それと同時に、エレクトも痛みから解放される。

「トキハ、大丈夫だ。これから帰る」

「先輩、今のは……………？」

「俺の、ドッペルゲンガーだ」

「ドッペル？」

「……………帰るぞ」

それ以上の質問を拒むように、エレクはトキハをサブコックピットへと追い返す。

今に、疑問なんて薄れてゆく。

何せ、もうすぐ祭りが始まるのだから。

それは戦いのなかでは、とても尊く、特別な時間。

疑問なんて、それに打ち消されてしまうさ。

エレクはそう考えていた。

まさか、その考えが、大きな間違いだったとは、予想もせず。

第七話・黒と赤（前書き）

終わる、一・二歩手前でございます

第七話：黒と赤

この日を待ちに待ったネバーランドの子供たちは何人いるだろう。

四分の三以上はそうなんじゃないかと思ってしまいうくらいに、ネバーランド、もといルナサイドは、活気づいていた。

今日は、ルナサイドの建設記念日。

ウォルーナ曰く、祭りの日。

しかし、そうだとしても、常と変わらない人物もいるものだ。

「んともー、クロ先輩もシロ先輩も、もうちよいハシャげっちゅうねん」

静かに眠りたくて医務に來たエレクと、資料を探しにきたルビアに、ウォルーナがツツコミを入れる。

「本番は夜だって言ったのは、お前だろ」

ベッドに横になったままウォルーナを睨んで、エレクはごろりと寝返りをうつ。

このごろ、体調が良くないらしい。

「祭りだと騒いでも、私の仕事は減らないからな」

ペラペラと共有症候群が記載されたファイルをめくりながら、ルビアは極普通に答えた。

祭りに参加して、遊びたいという無念さがつかげえない。

「お二人さん、もうちょっとソフトにな……………ちょっと店をば、見て回るくらいしてきたら……………」

「遠慮しとく」

「後からな」

人形片手に訴えるウォルーナに対し、至って短く返すクロとシロの二人。

ため息も出ない。

「……………」

沈黙。

そのうち、エレクの気配が弱くなり、寝てしまった事に気付いたのは、ルビアがベッドの方をチラチラと見ていたからだった。

「…………寝れるんだな、こいつ」

ソファーに腰掛け、ファイルを開きながら、ルビアは意外そうに言う。

その点に関しては、ウォルーナも同意見だった。

「人前で寝れるんやね、黒猫ちゃん」

「黒猫、チャン？」

「なんか猫っぽいやん」

「生意気なところとかか？」

ふん、と笑うルビアは、それでもファイルから目は離さない。

字の羅列を追っていつて、所々でメモをとっている。

「そんなに頑張らんでも、ゆっくりでいいんやで、ルビア。この問題は、難しいんやから」

言いながら、ルビアにあわせて自分も仕事を始めるウォルーナの表情は、呆れた笑顔だった。

机の引き出しから、書類を出して、サインを書き入れる。

余り量はないので、直ぐに終わるだろう。

「…………別に、俺に合わせなくていいぞ」

ルビアはそう言うが、ウォルーナは笑顔を返しただけに終わった。

「ええね、気にせんで。自分でやってるだけやから」

「そうなら、いいんだが」

「……………うう、ん」

「……………」

小声でやり取りしていた会話が、エレクの寝返りで中断される。

少しばかり冷や汗モノだった。

起こしてしまったのかと思ったのは、ウォルーナだけのようだった

が、心臓に悪いのには代わりはない。

そこからは、ただ黙々と、個人の仕事が続いた。

黙々と、黙々と。

「……………終わってしまった……………」

しばらくして、そう呟いたのはウォルーナだ。

ルビアは、最後のファイルに目を通していたところだったので、ウォルーナはルビアを待つことにした。

「……………ふう」

小さく息をついたルビアが、ファイルを閉める。

少し満足気なのは、気のせいではないはずだ。

「ルビア、息抜き行かへん？」

立ち上がり、軽く誘ったウォルーナに、ルビアは存外簡単に頷き返

し、ファイルをもとの位置に戻した。

「それもいいな。　ちよつと見てくるか」

「いえっさー！　何があるかなあ」

「落ち着け」

やはり人形片手に、ウォルーナはルビアを引っ張り、出て行ってしまった。

しかし、この時二人は、医務室にいた、もう一人のことを、完全に失念していたのである。

エレクがいる事を忘れたまま、彼らは行ってしまったのだ。

そこに

「失礼します。　えっと、エレクさんはいますか？　ウォルーナさん？　ルビアさん？」

やってきたのは、リリンだ。

手には、シロのスーツと青のネクタイ、クロのスーツと赤のネクタイが携えられていて、今晚の衣裳の確認に来たのがうかがえた。

「いらつしやらないんですか……っ、きゃあっ！？ え、エレクさん！？」

「…………ん？ 何だ、またお前か」

「エレクさん、いらしたんですか？」

「寝てた」

寝ているエレクに気が付かなかったリリンは、悲鳴を上げて数歩後退し、その悲鳴に目を覚ましたエレクは、いつぞやの事を思い出しながら、髪に手櫛を入れる。

もう一度眠る気はないようだ。

黒の制服の襟のボタンを閉め、靴をはき、ノロノロとリリンの前へと行く。

「……………それ」

そう言うエレクの視線の先にあったのは、クロのスーツと赤のネクタイだ。

頭の中で、ウォルーナが言っていたコーディネートを出す。

「これ、エレクさんのスーツです。寸法は合っていると思うんですけど……」

「……………大丈夫だろ」

くあ、と欠伸をしたエレクは、医務室内を見渡し、首を捻った。

「ウォルーナと、ルビアは？」

「お店の見物にでも行ったんじゃないでしょうか？ 私が来たときにはいませんでしたよ」

「へえ……」

「あの、エレクさん」

「何？」

視線を一度下に下げたリリンを、エレクは上から見下ろす。

柔らかそうな茶色の髪が綺麗に梳いてあるのが分かる。

戸惑うように、口元に手を当てながら、リリンはエレクを見上げた。

「私も、エレクさんの言う作戦は反対です」

エレクを心配するような瞳で、リリンは彼を見上げる。

「誰かの為に、誰かがいなくなるなんて、そういうのはおかしいと思うんです」

「……………」

「出来るなら、もう、誰も失いたくないです。共有症候群でいなくなる人も、出したいくないんです」

「……………そうか」

小さく震えるリリンの手に、エレクは自分の手も添え、ゆっくりとリリンの胸の高さまで持ってくる。

「でも」

少しだけ、その手をリリンの方へと押した。

「俺は、それしか知らないんだ」

エレクはリリンの手を離す。

そのタイミングで、ウォルーナとルビアが、医務室へと帰ってきた。

ウォルーナは気さくに笑い、衣裳を見つけて、リリンを誉める。

ルビアは呆れたように微笑む。

エレクはベッドに腰掛け、リリンは曖昧に笑った。

エレクはまた、誤魔化した。

慣れない服を着ているせいか、エレクは体の動かしにくさに、悪戦苦闘していた。

着てみたはいいものの、やはり窮屈で、人前に出ようとは、到底思えない。

が。

「クロせんぱーい、遊びましょ！」

「先輩！」

部屋の外から、ウォルーナとトキハの呼び声が聞こえる。

激しく、拒否したかったが、それが許されるほど、彼らの意志は薄くはない。

ため息をついて部屋から出ると、すっかりめかし込んだ二人が、満面の笑みで立っていた。

「へへん、いきますか、黒猫先輩」

「猫………？」

「先輩、みんな待ってますよ！」

「待ってなくていい」

早くも疲れ始めたエレクは、引きずられるように、宇宙の見渡せる廊下を嫌々あるく。

向かうのは、ルナサイドの中でも一番大きい、中央堂だ。

出撃ポッドにも医務室にも、司令室にも近いという、通常は休憩のスペースとして使われている場所。

ベンチを片付け、植木鉢を寄せればホールになるという、優れものだ。

「エレク、笑顔やで、笑顔」

「俺にそういうのは求めるな」

「努力せえや。 トキ八君を見習って！」

「奴は天然だろう」

トキ八を先導に歩きながら、ウォルーナはエレクの背を叩く。

「一応、注目の的なんやからな」

「最悪だな」

冗談ではない、と言った表情でエレクはウォルーナに押されて、自分を呼んでいるトキハのもとへと歩きつく。

「ほら、クロ先輩連れてきたよう！」

「馬鹿ッ、叫ぶな！」

ホール中に響くであろう声で、彼は仲間達に手を振った。

しかし、その声に反応して振り返るのは、トキハの友だけではない。

まさに注目の的になっている。

「馬鹿か、お前は！」

思わず声を荒げたエルクに、ドヤドヤと後輩が押し掛けてくる。

「先輩、素敵です！」

「やっぱり、黒と赤なんですわね!？」

「スーッ、似合ってます」

「マフィアの若ボスみたい！」

「シロ先輩つ並んでみてください!」

「握手してくださあいっ!」

「う、な…おい!」

あっという間に包囲されたエレクは、彼には珍しく狼狽えてしまっている。

見ていて面白かったので、ウォルーナは助けない。

遠くから見ると、エレクが保父さんに見える。

と、そこに、ドレスを着たリリンと、白のスーツのルビアが現われた。

同時に、彼らの目がルビアに向けられる。

「シロ先輩だ!」

「せーんぱーいっ!」

「な、何だっ!」

先程のエレクと同じような状態に、今度はルビアが陥っている。

その間に、そろそろホールの隅に移動したエレクは、息をついて壁に寄り掛かり、少しネクタイを緩めた。

ホールは低くかかっているクラシックと柔らかな照明の効果で、雰囲気がいい。

笑顔で話し合う、大人に成りきれない子供たちを眺めがら、エレクは防壁の向こうの宇宙に思いを馳せていた。

ドッペルゲンガーがいた、あの宇宙。

母星と親友を奪った、堕天使側の最強。

親友がいなくなった日に負傷し、エレク自身を吸収しようとして失敗した堕天使。

そのせいで、エレクの体は、異常をきたしてしまったのだ。

身体の中に、もともと埋め込まれていた、体調把握の為のメモリーカプセルとは別に、エレクの体の中には生命維持装置が設置されている。

丁度、堕天使に受けた傷の中に。

右の、脇腹。

そこには、空き缶程度の生命維持装置と、それに内蔵されるようにメモリーカプセルが保管されている。

母星の技術者が、エレクのためだけに開発した、技術の粋が。

反応するように痛む、その脇腹に手を置いて、エレクはあらぬ方向に視線を馳せた。

「……………飲みますか？」

目の前に差し出されたグラスに、エレクは顔をあげる。

いたのはリリン。

自分の分のグラスも持っている。

「シャンパンです。けれども、ジュースとなんら変わりませんよ」

「……………ありがとう」

グラスを受け取って、エレクは立ち上る炭酸の泡を見つめる。

「あなたは、幸せか？」

「はい？」

一口ふくんだシャンパンを飲み込んで、リリンはエレクを見返す。

聞いていなかった。

「あんたは、幸せか？」

「……………そうだと思いますよ」

「そうか」

「……………エレクさんはどうなんですか？」

「俺は、どっちでもない。普通だ」

シュワシュワと鳴るのを見ただけで、エレクはいつこうにシャパンを飲もうとは思わない。

首を傾げたりリンが、声をかけようとした時、それより先に、ルビアがエレクの前に立ち、エレクに呼び掛けた。

答えはない。

代わりに、手からグラスが滑り落ち、床にぶつかり砕け散った。

「エレクッ!？」

うつすらと汗ばんだエレクを支え、ルビアとウォルーナは、医務室へと走った。

しかし、途中で警報が鳴り、ルビアが離れ、代わりにリリンが入る。

「ち、こんな時に……。頼んだ」

「はい！」

「そっちも、きばりや」

騒々しくなったネバーランドに不安を感じたりリンだったが、彼女はエレクの看病を任された身だ。

今更、ルビアの後は追えない。

「何や、これっ！！」

いつの間にか、呼吸器まで装備していたエレクの、身体の状態を見て、ウォルーナが叫んだ。

このようにして彼が叫んだのは、聞いたことがない。

「どうしたんですか！？」

駆け寄るリリンに、ウォルーナがモニターを見せる。

「生きてる人間にはありえへん事や。 エレクには心音がない……
……」

「心音が、ない？」

「身体のアッチこっちが変何や。 機械の反応を見るかぎり、どっかに生命維持装置があるはずなんやけど………分からん。 装置の
ちようしが、おかしいんちゃうか？」

心音が無くとも、呼吸はしているエレクを、リリンは複雑な表情で見守る。

自分の命が軽い、と彼が言った意味が、分かる気がした。

作り物の命。

彼は自分の事を、そう思っていたに違いない。

そして、こうなる事も。

「……………す、な」

うつすらと、苦しげに朱の瞳を覗かせたエレクトが、何事かを呟いた。

「はあ？ 何、何やて、エレクト？」

「エレクトさん！」

覗き込むように、ウォルーナが顔を近付ける。

「出すな……………天使を、出させるな……………あいつは、強い……………」

その言葉に、ウォルーナは脱兎のごとく駆け出した。

向かうのは、ルビアのいる司令室だ。

それを追い掛けようとしたリリンの手を、エレクトはつかみ、引き止める。

「エレクト、さん？」

「俺を、連れていけ。 出撃ポツドだ」

息の落ち着いたエレクは、必死な眼差しで、リリンの腕を掴んでいた。

それは痣ができるほど強く。

リリンは、エレクに肩をかし、二人で立ち上がった。

第八話：消えるのはお前だ

「出したらあかんっ!!」

「ウォルーナ!?」

息も絶え絶えに叫んだウォルーナを、司令室にいたスタッフ全員が凝視した。

席からおりたルビアがウォルーナに尋ねる。

「何があつたんだ、ウォルーナ」

「話は後や、出したらあかん、あかんねや! 今すぐ、天使下げて!」

「………まだ、こちらに残っているのは!？」

「七番だけです!」

「では、待機していると伝えろ! すでに出たものに対しては、後退退避するように通信!」

「了解! こちらネバーランド! 撤退退避!」

次々と伝達が伝わってゆく。

それを聞きながら、ウォルーナはハラハラと空域のモニターを見る。

『司令、下がれません！ 向こうの墮天使によまれています！』

「焦るな！ 少しずつ、確実に下がれ！」

『……………やってみます！』

切れた回線。

しかし、徐々に下がりつつある天使達に、ルビアは瞳を細める。

「で、どうしたっていうんだ、ウォルーナ」

「エレクが、下げるっていうたねん。 奴は強いって」

「エレクが……………？」

「うん」

顎に手を当て、何かを思案するルビアを、ウォルーナは不安げに見つめる。

ルビアは考えていた。

ここで天使達を下げたとして、次はどうするのかと。

まさか、この施設だけで戦う訳にはいかない。

とすると、また天使を出さなくてはなくなる。

なら、下げる必要は……？

「……………まさか、エレク！」

「ルビア！？」

一つ、思い当たる節があつて、ルビアは司令室を出ようと、足を踏み出した。

その時だ。

『先輩っ！？ 先輩！！』

『うわあああっ！！？』

「司令！」

「どうした！？」

突如、司令室が悲鳴に包まれ、緊張が高まる。

『司令、メインのパイロットが……うぐあぁっ!?!』

「どうした、おい！ 三番！」

「司令、次々にパイロットの生体反応がロストしていきます！」

『シロ先輩い、先輩がいなくなっちゃったよっ！』

『メインが消えました!! 司令!』

泣き声と、叫び声の渦。

耳を塞いでいる生徒も多数いる。

「……………な」

茫然とするルビアの横で、ウォルーナが頭を抱えた。

「共有症候群や……………」

「馬鹿な」

「向こうの墮天使、全部承知のうえでやっとなるんや！ くそっ！」

血が出るほど唇を噛み締めたルビアは、一発、思い切り壁を殴り付けて、司令官席に座り直す。

「全員下がれ！ 迅速にだ！ 仲間を見捨てるな！」

『はい！』『了解しました！』『……………分かりました！』『了解！』

震えた声で、それでも叫ぶように帰ってきた声に、ウォルーナは泣きそうになるのをこらえる。

無事なパイロットは、ほんの数名しかいないだろう。

それでも、彼らは帰ってくる。

「動きが……………」

その直後からだ。

全てとはいかないが、天使の動きが見違えるほどスムーズになり、仲間を抱えてネバーランドに戻り着こうとする天使まで現れた。

天使を操縦する、というよりは、天使が動いているという感覚。

「天使に………なったとしてもいうのか、お前達は………！」

思い出されるのはエレクの言葉だ。

共有中に末期の発作が起ると、天使に生まれ変わる。

そう言ったのは、エレクだったはずだ。

では、消えた同胞は、天使として、そこに存在し続けているということ。

まだ、この場所のために戦ってくれている、ということだ。

「……………ありがとう」

拳を握り締め、ルビアはそれだけを言った。

それしか、言えなかった。

▼
▼
▼
大半の天使が戻ってきたそこには、無事に帰ってこれたサブのパイロットと、意識のないメインパイロットが数名、力なく座り込んでいた。

「……………クロ先輩」

「トキハがあっ！」

「分かってる」

コックピットから引きずり出されたまま、寝転がっているトキハに、二人の少年が寄り添っていた。

話によれば、エレクが来ないので、一人で天使を操縦していたらしい。

抱えられて戻ってきたのは、トキハだった。

「トキハ」

「クロ先輩、僕……………」

「馬鹿な事したな」

「ごめんなさい」

「しかし、一人で乗ったにしては、がんばったな」

僅かに微笑んだトキハに、エレクは笑顔を返しはしない。

きつともう、何も見えていないはずだ。

天使に一人で乗って、ただで済む訳がない。

しかも、天使自体に慣れていない新米パイロットなのだ。

ここで寝ている事の方が奇跡。

「ドッペルゲンガー、見たら、死んじゃうって、本に書いてたから」

「お前……………」

「先輩が死んじゃうのは、ちょっと嫌だから」

「そうか」

ふう、と息をついて、トキハは目蓋を下ろす。

表情を曇らせたエレクは、トキハの手に触れてみた。

が、触れられなかった。

「共有症候群………ですね」

「ああ」

フラッと立ち上がったエレクは、トキハの乗っていた天使を見上げる。

まだ、どうにもなっていない、まっさらな機体だ。

「エレクさん」

「……………大丈夫だ。俺は死なないし、トキハだっていつか助かる」

「行くんですか」

「それが、俺がここにきた理由だからな」

「死なないで、ください」

「死にはしない」

俯いたリリンと、パイロット達が見守るなか、エルクは機体のコックピットにゆったりと腰掛けた。

向こうには、天使化したパイロット達がいて、雑魚を一掃してくれているだろう。

「……………」

ゆっくりと目を閉じ、エルクは、ドッペルゲンガーを頭のなかに思い描く。

仲間を殺し、トキハを傷つけ、自分を吸収しようとした、ドッペルゲンガー。

朱色の瞳は、その堕天使だけを射ていた。

「消えるのは、お前だ」

堕天使と対峙した瞬間、エルクはそう言い放った。

視界には、そいつしか入らない。

.

第九話：漆黒の天使

ついに、エレクが行ってしまった。

ルビアはモニター越しにそれを確認した。

「……………エレク」

何が言いたいのかは分からない。

しかしルビアは、エレクに何かを伝えたかった。

何かを。

出撃ポッドへ迎う廊下を走りながら、ウォルーナは唇を噛んだ。

「あの馬鹿たれがあ、何考えてんねん！」

それしか手が無いと分かっている、それでも納得できないことはあるのだ。

はき捨てたウォルーナは、そのまま走り続けた。



「リリンさん……………」

「分かってます。エレクさんの言った意味は」

出撃ポッドで立ち尽くすリリンは、エレクが行ってしまった通路を見ながら、両手を組んだ。

死にはしない。

死にはしないが、人間かどうかは分からない。

そういう事なんだろうと思う。

「分かっています」

真っすぐに見つめた通路は、余りにも暗く、闇に続いていた。

▼

▼

▼

「消えるのは、お前だ。ドッペルゲンガー」

口元に、再度出会えた歓喜の笑みを浮かべ、エレクは墮天使と対峙していた。

「お前に復讐できれば、それで俺はいいんだ。 ついでにあいつらが生き残ってくれるなら」

こちらを威嚇するように、唸りをあげる堕天使に、エレクは口の端を、さらに持ち上げる。

「ははっ」

トンツ、と地面を蹴る。

その通りに動く天使に、エレクは確かな手応えと、共有症候群の進行具合を把握する。

もうすぐだ

組み合った腕を振りほども、駒のように回転して、ドッペルゲンガ―を後方へと吹き飛ばす。

それを追い掛け、更に一撃二撃を加える。

背がチリチリと熱を放ち始めたのが分かる。

視界が、リアルに広がり、感覚が研ぎ澄まされていく。

まだ、まだだ。

自分が変わっていくという感覚を覚えながら、エレクはただひたす

らに、ドッペルゲンガーを攻撃し続ける。

もう少しだ。

ドッペルゲンガーが口を大きく開けて、噛み付こうとしてきた。

それを避けたエレクは、その背に思い切り蹴りを入れ、笑った。

きた。

蹴り飛ばしたドッペルゲンガーを中心に闇が広がり、エレクを包み込んだ。

きた、きたきたきた！

親友が敗れた、ドッペルゲンガーの業だ。

俺の手、俺の足、俺の羽

もう、コックピットに座っているような感覚はない。

宇宙に漂って、やつが来るのを待っているだけだ。

手を前に延ばしてみる。

闇しか見えない。

天使は白だけとは限らない。

それを奴は知っているだろうか。

黒い天使だって、いるんだ。

なあ？

両手を前に伸ばしたエレクは、ぐいっと何かをつかんだ。

背中が、チリチリとチリチリと熱い。

この空間にいるのは、自分か墮天使かしかない。

なら。

切り刻んでやる！！

天使の主の瞳が、ぎらりと輝く。

闇のなかに、光の粒子が集まり、何かの形になってゆく。

闇を照らし、暴く翼は、エレクの手には捕らえられたドッペルゲンガーに刃を向ける。

対するドッペルゲンガーも黙ってはいない。

いつかもそうしたように、体から槍のようなものを出して、エレクに突き立てる。

しかし、エレクは動じる事無く、捕らえる手に、更に力を込めた。

今更、離すとも思っているのか？ …… 仲間の仇、思い知れ！

光が弾ける。

幾千、幾万の刃になった翼は、ドッペルゲンガーごと、闇の霧を打ち破った。

一瞬、墮天使かと思紛う程に黒い天使は、手にしていた墮天使だったものを手放し、その羽を十二分に伸ばして、吠えた。

モニター越しにでもそれを見たのは、ルビアとスタッフだけだった。煌めく翼が散つて、その天使が活動を停止しても、暫らく、誰も何も言わなかった。

天使化した彼らがエレクをネバーランドに連れてきた時も、誰も、何もなかった。

からん、

と、落ちてきた、空き缶程度の大きさの何かを拾っただけ。

ただ、それだけだった。

.

最終話：黒猫からの贈り物

あの日から、二週間と二日がたった。

相変わらず墮天使は襲ってくるが、天使化した彼らと、絆で繋がったパイロット達のおかげで、危なげなく生活は送られていた。

ただ、エレクトだけは、あれ以来動くことはなく、ネバーランドの地下に安置されている。

漆黒の天使、エレクトと言う名の天使は、半永久的な休息期にはいつたらしい。

詳しいことは分からない。

だが、彼のおかげで、ネバーランドは、ルナサイドへと姿を変えた。地球から、人が来れるまでになったのだ。

そして初めて、木星が、本当に無くなってしまったことを知った。

「がんばってますか、司令官」

「地球からの大人が代わってくれるのかと思ったのに……とんだ見込み違いだったよ」

「残念やね、どんまい」

前よりも、大きく新しく修理されたルナサイドの司令官室で、ルビ
アは書類に目を通していた。

白衣を羽織って遊びにきたウォルーナの手には、相変わらず人形が
携えられている。

「で？ 何しにきたんだ？」

呆れたように笑うルビアに、ウォルーナは勝手にソファ―に腰掛け
ながら、テーブルの上に、空き缶程度の大きさの何かを置く。

それにルビアの瞳は見開かれる。

「…………それは」

「エレクさんの機体から落ちてきた……………」

「あ、お帰り、リリンちゃん」

雑務から戻ってきたリリンが、ルビアの隣のソファ―に腰掛ける。
ルビアもリリンも興味津々だ。

「なにか、分かったのか？」

「分かったも何も……まあええわ。百聞は一見にしかずや」

ウォルーナはそう言うと、装置の端に付いていたネジを少し回す。

すると、あとは勝手に開いて、中から少し短い、ペンのような機械の棒が出てきた。

「これは……」

「し、黙って」

ルビアが伸ばした手を止めて、ウォルーナは口到人差し指を近付ける。

訳は分からなかったが、ルビアはとりあえずそれに従う。

ジ、ジジジ……

しばらくして、少しのノイズが入り、続いて聞き慣れた声が耳に届いた。

『…………え、これは俺の体調を逐一、報告するための装置です。所持者名はエレク。木星パイロットのエレクです。以上。…
…………あの、これでいいんですか?』

自分達が知っているのより、遥かに若い、まだ木星が無くなるなど考えもしなかった頃の、エレクの声が、頭の中で反響される。

「体調把握の機械、これな」

ひょい、と機械棒を持ち上げたウォルーナ。

「これん中に、共有症候群のデータもしっかり入ったねん」

「じゃあ……………」

「ん、寝っぱなしの方は、そうかからんで、回復の方法が見つかるかもしれん」

「そうか」

呟いて、ルビアは天井を見上げ、手のひらで顔を覆った。

「とんだ置土産だ」

そう言った彼は、しかし、まったくうれしそうではなかった。

すべて、奴の計算通りのようではいけすかない。

「繋ぐ戦いを、エルクさんはしていたんですよね」

「ん」

小さくそう言ったリリンにウォルーナが答えると、リリンは少し悲しそうにしながらも、笑った。

「ちゃんと、繋がってますよね」

「繋げるさ、これから」

座り直したルビアは、複雑な心境のまま笑みを作った。

なぜだか、きつとなんとかなる気がした。

なんとか、出来る気がした。

今日も月は、白く輝く。

あの翼のように

最終話：黒猫からの贈り物（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4870a/>

孤高の黒猫

2010年10月9日06時38分発行